

アジアの風

ビジネスの先を読む



後藤 康浩 (ごとう・やすひろ)

亜細亜大学 都市創造学部教授
早稲田大学政経学部卒、豪ボン大学MBA取得。1984年日本経済新聞社入社、国際部、産業部のほかバーレーン、ロンドン、北京などに駐在。編集委員、論説委員、アジア部長などを歴任した。2016年4月から現職。アジアの産業、マクロ経済やモノづくり、エネルギー問題などが専門

際立つ台湾の光と影



観光客が戻った台湾・九份



海外からの留学生が戻り始めた台湾の大学（淡江大学で）

アニメ映画『千と千尋の神隠し』の情景描写のモデルになったとされる台湾北部の観光地、九份。コロナ感染で長らく客足が遠のいていたが、3月初旬に訪れると九份の特徴の狭く急な階段には日本、韓国、米欧系など旅行客が殺到し、歩けないほどの賑わいだった。台北に隣接する新北市にある名門私立大学、淡江大学を訪問すると、大学関係者は「海外からの留学希望者が殺到し、受け入れ対応に追われている」と語った。上海、大

連など中国本土の大学で中国語を学ぶにはビザやコロナ対策など複雑で不透明なハードルがあり、台湾で中国の「普通話」を学ぼうという学生が増えているからだ。ニュースで話題のTSMCなど台湾の半導体メーカーの話題を聞かない日はないほど台湾経済は好調といえる。TSMCは米アリゾナ州や日本の熊本県など海外での工場新設が話題になっているが、2ナノ、3ナノといった最先端プロセスでは新竹、台南、高雄など

台湾内での工場建設がより活発だ。台南などではTSMCが大量採用するため「まったく人を採用できない」といったばやきが他の企業関係者から聞かれる。台湾にとって最大の取引先である中国の消費不振や中国本土からの観光客が途絶えていることは打撃だが、それを埋め合わせるエネルギーが今の台湾にはある。かといって、台湾の知人と話をして感じるのはコロナ前にはなかった漠然とした将来への不安の

高まりだ。習近平政権は台湾への軍事的圧力をますます高めており、日米のメディアでも頻繁に語られる武力による統一はもちろん不安材料に違いないし、中国による諜報活動や世論工作の激化で「周りに中国側に通じたスパイがいるように感じる」と指摘する人も少なくない。だが、それ以上に「台湾の未来」が米中冷戦の激化やロシアのウクライナ侵攻をきっかけとした世界の分断の加速で一段と不透明になってきたことに不安の根があるように見える。

「中国との統一」か、「台湾独立」という存在をめぐる二項対立ではなく、アイデンティティーが再び見えにくくなりつつあるからかもしれない。TSMCや電子製品の受託製造専門の鴻海精密工業（ホンハイ）、ペガトロンのなどが生産拠点のグローバル展開を進めれば進めるほど、台湾という地理的存在から来るアイデンティティーは薄まりかねない。台湾の光と影のコントラストは一段と深まっている。その影の部分の打ち消す力は海外からの投資であり、台中のブリッジになる日本企業の役割は重要だ。